毎月1回　25日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月28日）　①

山と博物館

第5巻　第2号　1960年2月25日

第1キャンプの朝

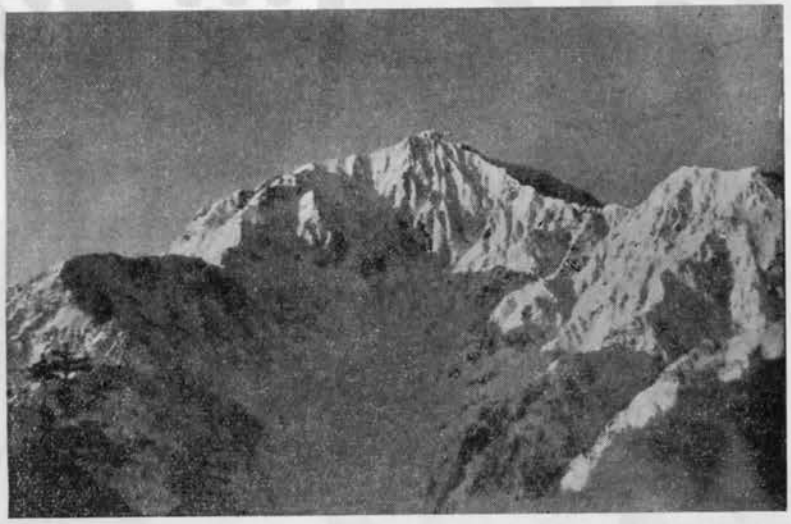
……1月14日より鹿島槍天狗尾根にテントを張つて一週間　天候に恵まれず、……

……撤収の朝わずかに晴れたが又すぐ手前の尾根もガスにかくれた。……

大町山岳博物館

北アを想う

田辺和雄



遠見尾根より鹿島槍

昨年の3月富士山吉田口五合目の佐藤小屋に泊つたときのことだが、小屋のおばさんの話で、先頃40何才だかの人が泊つたので、これがこのシーズンの最高令者だと思つていたらもう一枚上手が来たとの事だつた。なるほど冬山をめざして登つてくる者の中では高令の部に入るだろう。私も今年はちようど満60才になる。本誌の編集係から何か随想風に北アを想うことを書くようにとの御依頼を受けて、自分の年令をあらためて考え直した次第である。実はまだそんな年だとは思わずに植物をあさりながら山歩きをしていたのだつたが。

私はまだ自分にも記憶のない物心のつかなかつた頃に、人の背におぶさつて箱根の双子山に登つたそうである。みずからの足で登つた山らしい山は、小学校五年のとき、亡くなつた父につれられて妙義山に登つたことである。父は旅行と植木が好きであつたから、今日の私をかくあらしめたのも、その影響であつたかもしれない。その後中学二年のとき、単身で——といつても案内人をやとつたが——浅間山に登つた。私の心は年とともに山にひかれ、それからは四季を通じて機会あるごとに山に出かけて今日に至つた。双子山のときから数えると、私の山歴は五十数年になる。もちろん私よりも古い山の先輩で今もなお山に登つている人もたくさんあるが、それにしても私の若かつたときの北アの想い出ばなしは、今の若い人たちからはある程度の昔ばなしとして聞いてもらえるであろうから、ここに二三の経験談を述べてみよう。

大正7年7月、当時中学4年生だつた私ははじめて北アに登つた。それは「山岳」の記事や誰やらの書いた本を読んで、夏でもたくさんの雪渓のきざみこまれている山に憧れたからであつた。一学期の試験がすむのももどかしいように、通学用のカバンと袋状に縫つた布の背負い袋とに富士登山と同じ程度の用具や食糧を詰めて、着莫座に金剛杖といつたいで立ちで中房温泉にたどり着いた。そして現在の百瀬孝氏の御尊父であつたろうと思われる御主人に燕岳一槍ケ岳一上高地一島々という希望の日程について相談に乗つてもらつた。「とてもあなた一人で行かれるような山ではない。案内人を有明村から呼んであげるから、それまでここに泊つておいでなさい」とのことで、早速その手配をしてくれた。ここでやはり単身で登山を計画してやつて来た小池新二君（現千葉大教授）と偶然にもいつしよになり二人で一緒に行くことにした。翌日畠山善作という猟師仲間でのベテランがきて、この人に案内を頼むことになつた。

中房を出て第一日の泊り場は二ノ俣小屋が定石だつた。東天井岳の南東方にあつた無人の猟師小屋だつたから、鍋ややかんや毛布などいろいろなものを持つてゆかなければならないので、善作の荷物はかなり重かつた。次の日は一ノ俣に下り中山を越えて二ノ俣から槍沢の本流に出て、その年にできたばかりの槍沢小屋泊。第三日は未明に出発して槍ケ岳を往復して上高地泊。その頃の上高地には旅館は草分けの清水屋（今の温泉ホテルの向つて左側の建物の位置にあつた）と五千尺とだけ。次の日は焼岳往復に一日がかり、大正池の湖面は現在よりもずつと広く、噴火後三年しかたつていなかつたから、水の中には枯木が一面に立つていて、ところによつては密林をなしていた。そして帰りは徳本峠を越えるのが唯一の路といつたようなことだつた。

この旅行で最も印象に残つているのは、燕岳から眺めた高瀬川の奥の残雪にきらめく山々であつた。今見れば格別な感慨を覚えるという程のものではあるまいが、こういう景色は写真でもあまり紹介されていなかつた時代だつたから、実に意外なものを見たという興奮にひたつた。それともう一つお花畠の美しいことにも目をみはつた。燕岳から大天井岳に続く尾根にはコマクサがたくさんあつて、折からあの愛らしいきれいな花をふんだんに見ながら歩いた。今日では一本でも二本でも花の咲く株に出会えば幸運だと思うほどになつてしまつたが、元来コマクサはかなり強い繁殖力があり、生長もさしておそい方ではないから、みんなが保護する気持になれば、昔の状態にもどすこともあえて困難ではないと思う。話題

はちよつとはずれるが、私は一昨々年雪倉岳の一部ですばらしいコマクサの大株の大群落を撮影している。詳しい位置は言いたくないが、そこでは一株で花茎が七十数本立つているのがあつたし、少しはなれたところから眺めても、ほんのりと淡紅色の敷物をひろげたように見えるほど、大した生え方をしていた。こういう美しいお花畠を、誰もが荒らすことなく観賞して通れる時代が来ないものだろうか。

さて前記の案内人畠山善作について一筆しておきたい。彼は親切で実直な好爺であつた。山もよく知つていて、霧の中にわずかに顔を現わした小さなピークでもよく名前を教えてくれた。彼と別れたのは槍ケ岳に往復して上高地にもどる途中の二ノ俣の合流点であつたが、そのときに私にこう言つた。「ここから上高地までは路がよくわかるから、もう案内人はなくてもあなた一人で心配はない。私は山を越えて近道を行けば今日中に有明村の家へ帰れる。あなたといつしよに上高地から徳本峠を越えて松本をまわつて帰ると、日当が一日分多くなるし、宿賃や乗物代も出してもらうことになる。あなたはまだ学生だからなるべくお金を使いなさるな。ここで別れよう」ということであつた。このときの日当などは今はよくおぼえていないが、一円二十銭ぐらいだつたろう。そしてそれは村で働いているよりもはるかに割のいい収入であつたらしい。客と見たらたかろうなどという気持がなかつたことは、今でも快い思い出として私の頭から忘れることがない。

私の北アの初登山は以上のような次第であつたが、それから八年後の大正十五年三月、積雪期の鹿島槍の初登頂に成功した。これも私にとつてはかなり大きな想い出である。積雪期の北アの登頂はその数年前からポツポツ成功が報ぜられ、槍・白馬・乗鞍・立山などが逐次登られていつた。しかしその間に大正十二年の松尾峠の遭難があつたので、私も計画はかなり慎重に立てた。冬山を志してスキーの練習にとりかかつたのが大正九年（飯山で、レルヒ中佐直伝と称する人から、一本杖を使つてのコーチを受けた）ピッケルとアイゼンを使い始めたのは大正十一年。そして大正十四年の三月に友人二名（石原厳、故塩川三千勝）と鹿島槍を目標として、鹿島部落の狩野久太郎氏方を根拠地として日帰り往復を企てた。まだ極地法という手段が取り入れられていなかつた時代であつたから、強行往復以外には手がなかつたのである。

この年はコースの偵察に終始した。まず夏路のある冷沢に入つて見たが、われわれの見た結果と鹿島の人たちの話とをもとにして、この沢は雪崩の危険ありと判断して、爺ケ岳の東尾根を迂廻することにした。こつちのコースは距離が長くなるばかりでなく、最初の取り付きが急斜面の密林でスキーが使えないという不利がある。また1950mあたりのところにヤセ尾根があることが夏の偵察でわかつていたので、冬はここがどうなつているかと思う不安もあつた。しかし現場を踏んでみて、この不安は解消された。そこはナイフリッヂになつていて、小さな雪庇が左右交互にできているくらいで、ザイルも要らな

チングルマの大群落

いほどのものであつた。雪の状態のかなり良いときに、全コースをワカンで歩いて、鹿島部落から爺ケ岳への往復が十時間余りでできた。これで時間さえかければ鹿島槍の頂上に立つことができるという見通しができたが、その間に日数を食つてしまつたので、これだけで引上げた。

翌十五年三月に、同じ顔ぶれでパーティーを組み、天候の良くない日には途中までのラッセルをしたり、1766.9m の三角点のある尾根の一角に雪洞を構築しておいたりして、晴天の日に往復十九時間の頑張りをして、ついに三月三十日に目的を達した。私が帰りにバテなければ、もう三時間ぐらいは短縮されたかと思う。

このとき頂上に立つた感激もさることながら、未明の三時間半に出発をして、1766.9mの三角点の雪洞で食事をしながら（明け方はかなり風が強くて飛雪に悩まされたが、雪洞が大いに物を言つた）鹿島槍の荘厳極わまりないモルゲンロートを仰ぎ見たことも、爺ケ岳から先の主稜を伝いながら絶えず立山連峰に相対し、殊に午后の日射しで刻々に山のひだの陰影の変化してゆく有様を眺めることができたのも 忘れられないよろこびであつた。

なお登頂の翌日大町にもどつて電車の時間待ちをしていたら、どこから話を聞いたものか、駅の売店のおやじがわれわれの行動をかぎつけて、新聞の通信員だか記者だかを呼びに行つた気配が見えた。それではというのでこちらはこつそりと駅の近くのそば屋に身を潜め時間ぎりぎりに馳け付けて、飛び乗らんばかりに電車の中へ逃げこんだ。私たちはその頃ひどくジヤーナリズムを毛嫌いしていたのであつた。この一件はこれもわれわれの山仲間の深田久弥君が面白がつて、最近もある記事の中に書いているが、それによると私が便所へかくれたとしてあるが、これは誤報であつて、お金を払つてそばを食べていたのであつた。

以上のほかにも北アでの想い出の種はいろいろあるが、それはまだそんなに時代のコケがついていない。今日この頃の話でも十年二十年の後になれば、もとはそんなこともあつたのかという話のたねにもなるだろう。私も慾ばつてもつともつと丈夫で山歩きをしたいと考えているから、「山と博物館」の発刊２０周年記念号でも企画されるときに、また何か書かせて頂くことにしよう。

（早稲田大学講師）

冬山 鹿島槍天狗尾根
……装備を中心にして……

武田睦男

毎年のことであるが、いつもそわそわして心の落つかない時期、それが冬山の山行のある約2ヶ月位前からいよいよ出発するという、そのときまでなのである。10月定例会で今期冬山の目的地が決つて以来12月に入つてからようやく計画が活発になつて、各任務担当者の目が異様に輝いてくる。すでに過去二回にわたる装備、また今回も装備係になつたので過去の計画などと比かくしての準備から登山までのことを気の付いたまゝに書いてみたいと思う。大町山の会も発足以来3年、年が変る毎に一段と充実して来た、それだけに今回の冬山が非常に期待されたものである。そして装備の点についてもそのことが如実に現われてきている。例えば個人装備に入るべき、アイゼン、ヘッド、ライト、テルモス、保靴油……等が昨年までは団体装備として扱わざるを得なかつた。それ程に各人の装備がなかつたのである。だから今年は昨年までのように調達のために飛び歩くということがなかつたから計画もスムースに運ばれていつた、しかしいちばん苦労したのはテントとかエアー・マット、ザイルなどである。テントは最初は18名の参加者だつたので最後の一張を苦労して捜していたのだつたが出発前に急に参加者が13名（うち2名は2日間のみ）に減つたためがつがりしたり、ほつとしたりだつた。結局テントは3張りで間に合つた。またエアー・マットも足りないものの一つであつたが方々から借り集めて、出発のときには計画した枚数より多くなつてしまつたが多くなつたものも、持つていつたので山では穴をあけたりしたものもあつて有効に使うことが出来た。またザイルは山の会の物を（5本）全部用意したのだがまだ足りなくて山では行動にさしさわりのあつたことは否定出来ない事実であつた。昨年は燃料の不足で困つたので今年は充分の余裕をみて計算をした。昨年初めて使つて非常に好評であつた、プロパンガスも最初の計画では使う予定であつたが隊員の変動で使用を断念しなければならなかつた。こゝでプロパンの長短を書くと次のようなものである。まず長所は取扱いが簡単である。常に火に気を配らなくてもよいからテント内の保温には石油コンロよりよい。また短所としては容器が非常に重いことである。今こゝで特に書いたのは今後容器が軽くなるように工夫されたら非常に使用価値が大きくなるからだ、もちろん石油コンロと併用してゞあるが…。使用量は1.5kg－2日である。12月も終りに近くなると社会がそうであるように我々にももう一つの正月の冬山、船窪尾根などの出発もひかえてあわたゞしさはひとしおだつた。そして正月の冬山も終ると天狗尾根の準備も最後で隊員全員が食糧、装備の購入及び梱抱と目の廻るような急がしさであつた。そんなうちでも運搬計画も立てなければならなかつた。1月14日いよいよ出発の日である。今までのあわたゞしさから開放されてほつとした気持である。天気も快晴で出発にはもつてこいの我々の成功を祝うかのようであつた。第1日目は思わぬ好天にB・Hまでの予定であつたのが標高1.400米位のブナ林の中に約半分の荷をデポすることが出来た。B・Hに帰つてくる隊員たちの顔も明日のC_1建設の確信に満ちた表情でいつぱいだ。2日目は天気も下り坂になつてきたようだが行動には影響がなかつた、C_1建設と同時にデポしてあつた荷も全部C_1に上げることも出来た。まるラッセル隊は第一クーロアール下までラッセルを終り、全員がC_1に入りカマボコ型テントの中で最初のカレーライスを味わつた。第3日目、天気も悪くなつて来たけれどC_1建設に向つた。ラッセル隊が出発してから30分位後に本隊が出発した。まだ外は暗くヘッド・ライトの光だけがあたりを明るくしていた。第一クーロアールの下で明るくなるのを待つていたラッセル隊といつしよになり登つた。こゝで我々の感違いから第1・第2クーロアールの間にテントを張つた。しかしこれが我々には結果的によかつたのだ。CⅡに入つてから丸2日天気も大荒れに荒れてその後も陽を見ることが出来なかつた。そして最大の努力をしたにもかゝわらず、ついに下山せざるを得なかつた。いちばん痛切に感じたことは行動ザイルの不足と天候の悪いことだつた。

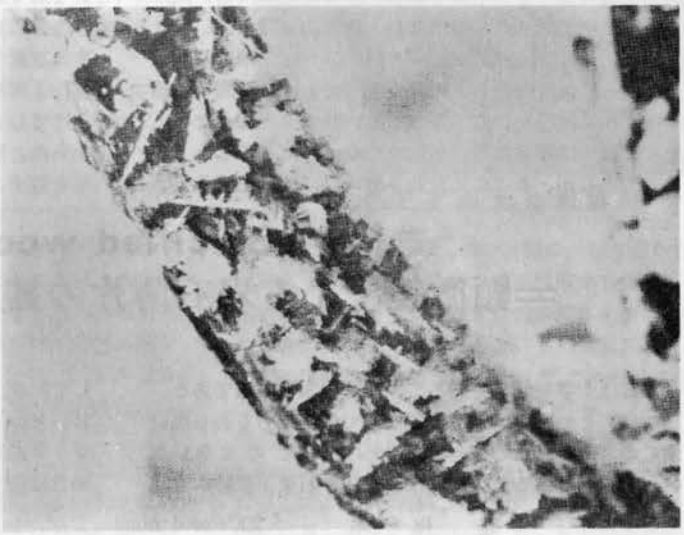
（大町山の会）

第1クーロアールを行く隊員

寒気の造形

海川庄一

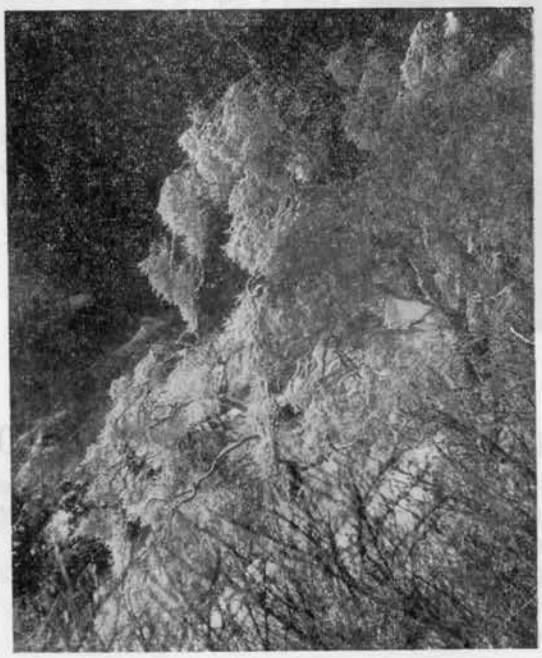
木花　最も美しい寒気の造形、それは一夜にして咲いた木花であろう。木花は樹霜とも呼ばれ過飽和の水蒸気が樹枝などに昇華して（霧にならず直接結晶して）できるものであり、針状、板状、樹枝状などさまざまな結晶である。雪の結晶の場合と同様針状のものは比較的高温でできるが、板状、樹枝状のものは低温でなければできないといわれる。樹霜は盆地や山麓で冬の晴れた夜、輻射による冷却のひどい時できるものであり、霜の出来方と同じであるが、霜よりも高い所まで多量につく。弱い風があると風上側により多くつくものである。樹木の枝についた樹霜が朝の陽光に輝きながら桜の花びらのように散り落ちる様ははかなく美しい。木花は水蒸気の昇華したものであるから次にのべる樹氷とは異なり霧との関係はない。**樹霜（木花）、樹氷（花ボロ、モンスター）、粗氷**を総括して**霧氷**と呼ぶのであるが、木花だけは霧氷と呼ぶのはあまり適当でない。一般に木花の発生するのは極めて特殊な条件であり、寒気が厳しく梢や周囲の気温が零下数度以下に下つており、無風又は微風の平静な環境においてである。



リンゴの枝についたシダ状結晶の木花

樹氷　冬山で最も親しまれるものに樹氷がある。これは樹霜のような完全な結晶ではなく、繊維状の構造をもつた歯ブラシ状の氷片から成つており、過冷却の霧の粒が地物に吹きつけられて直ちに氷りついたものである。風上側に多量につき、外面には樹霜がついていることが多い。樹氷の出来るのは－5°C以下であるといわれる。樹氷の発達には風速の大きいことが条件である。冬山で見かける樹枝に歯ブラシ状についた樹氷は**花ボロ**とも呼ばれるものであり、霧氷の一般的なものである。樹冠をすつかり被ういわゆる**モンスター**と呼ばれるものは過冷却した水滴と雪がまじつたものが極めて低温のもとで烈しい風によつて樹木に衝突し氷着したものである。蔵王山は樹氷で有名になつた山である。その奇怪な樹氷群はいわゆるモンスター（氷のお化け）である。一般に裏日本の山では冬の間、大陸の高気圧から吹き出して日本海の水蒸気を多量に含んで来る湿つた季節風が吹きつけるのでほとんど毎日樹氷がつく。樹氷は次第に発達し、積雪を抜いて立つシラビリやオオシラビリはすつかり氷に固められる。樹氷に固められた樹木は冬の厳風に直接その肌をちらさないですむので、樹木は積雪と共に植物の防寒具として役立つものとみられる。花ボロも樹氷であるが、今日一般的には樹氷ということばは針葉樹がモンスターに変つたものを指すようになつた。

遠見尾根の樹氷（遠藤好一氏）



雪華　オーバーの袖におりた雪の結晶の美しさにみとれたことがあるだろう。昔から雪の結晶のことは雪華と呼ばれ、日本では下総古河の藩主であつた土井利位（1789—1848）が拡大鏡により観察してスケッチした図を著書として発表した。有名な「雪華図説」「続雪華図説」である。この書は当時の科学書としては実に立派なもの

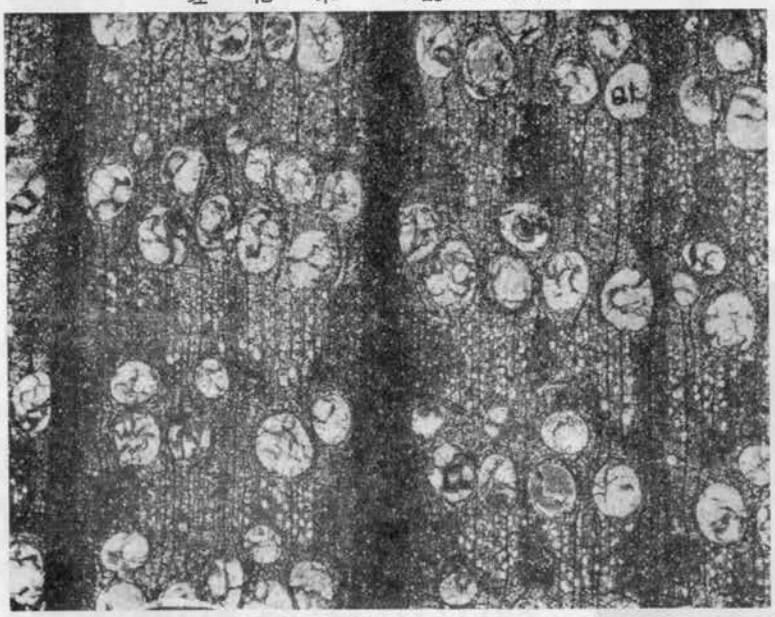
とされている。雪の結晶は六華と呼ばれる星形のものだけには限らない。針状のものや鼓形のものなどいろいろである。針状結晶は－°5C～－6°Cくらいの比較的高温の際生成されるという。雪は降つてくる時、結晶が一つ一つばらばらになつて降る場合と、いくつかの結晶が付着して雪片をつくつて降る場合がある。雪片は雪が降つて来る途中で集つたものであり、比較的気温の高いとき見られ、一般にはぼたん雪と呼ばれている。雪華は時がたつと、とけたり昇華して形が変化してしまう。雪華の標本などは低温室を作つて管理しない限り保存できない。そこで我々は顕微鏡写真に収めたり、スケッチしたりするのであるが、ここに比較的手軽に誰にでも出来る雪華の形の保存法がある。それはビニール塗料を使つて雪華の形を写し取り「**レプリカ**」（同体）として保存する方法である。薬局へ行つて家具などの艶出しに使うメタラ米ク液とそれを薄めるシンナを買つて来る。マッチの軸をちよつとなめて、これを雪の花にふれさせると花がついて来るからそれを小型のガラス板の上にのせ、つま楊子の先にメタラック液を少しつけて、花につける。このまゝ放置すると雪華は蒸発し、雪華型のビニール膜が残り、「雪のレプリカ」ができる。気温が高いと雪の花がとけてしまうから零下数度以下の時をえらんでやらねばならぬ。樹霜や樹氷もメタラック液を塗つておけばその形を残すことができる。　（山博学芸員）

珪化木 Silicified wood
＝顕微鏡による岩石薄片の観察＝(1)＝

太田昌秀

写真は十字ニコルを通してみた珪化木の組織である。（20倍）この写真は幹に直角な面で切ってあるから黒いすじの方向が木目の方向に当るわけだ。この大きい玉（Qtと書いてある部分）には放射状の石英が細粒に充塡しており、これはコロイドシリカ（SiO_2）の沈澱結果らしいということだ、石炭組織学の本などでは、よくこのシリカが高温型であることがあると書いてあるが、この場合は全くのα一石英である。

珪化木　×20Crossod nicol



SiO_2 には大分けして3つのグループがありその各々が2つに分けられる。高温（1200°C以上）では Cr-ystobalite クリストバライト（α及びβ、中温（1200° C～700C°）では Tvidimite トリデイマイト（α・β）、低温（700°C以下）では Ouarty 石英（α・β）となる。これらはそれぞれ少しずつ異つた格子恒数をもつているのでX線で容易に見わけることができる。このサンプルについて、ノレルコで粉末法を用いて測定した結果はα石英のみであつた、このことは、このコロイドシリカの沈澱結晶のできる条件がかなり低温であつたことを示している。とに角3千万年前の被子植物の組織も化石の中にこのように見事に残つている。

（筆者は北海道大学理学部）

◆地学書紹介◆

宇宙と星　畑中武夫著　岩波新書 ¥100

とても物語風の楽しい文章で現代天文学の最新の話題を話してくれます。星の名前を憶えたり、それにまつわる神話、（岩波文庫・ギリシャ神話・野上弥生子訳）を聞くのも楽しいでしようが、現代天文学の星の一生の物語は神話よりもつともつと空想のような素晴らしい感じを私達の心に呼び起します。ちようど宮沢賢治の宇宙列車（銀河急行）のような世界をもつと確かな姿で描いてみせてくれます。星の沢山美しく輝く山国ではこんな話が人の心に食い込むのではないでしようか。（太田昌秀）

最近の科学書のなかからポピュラーなものだけをえらんで、こんご毎号この紙上において紹介していきます。

温泉中に生育するシロゴケ

平林昭一郎

大町市内葛温泉附近の樹木に着生するコケを調べようと思い、昭和30年12月29日から1月2日の年末年始の休を利用してでかけた。毎年の例として今頃になると60cm位の積雪量は普通だが、この年に限つて珍らしく日陰に僅かみられるほどで、バスも温泉口まで行き全く玄関横ずけだつた。年末のためか、いつもにぎやかな温泉は人影が少く静まりかえつており、高瀬川の水音が一段と高く聞える。新館の横を通り自炊専問の「五輪の湯」へ行く。顔なじみのおばさんにお願いし部屋へ案内してもらう。

午后2時頃下見のため「五輪の湯」の周りを歩く。並木道のサクラの老樹にはチヂレキンモウゴケ、ムクムクサナダゴケが多く、その下の土上には小さなシロゴケの銀白色がみえる。昔たくさん生育していたヒカリゴケの岩穴は、荒れ放だいで今は全く面影もない。ブナの朽木上には、チリメンゴケやクチキノクサゴケが、おわんを伏せたように着生しており緑黄色が薬かだ。崖の崩れたその土上にはヒロハタチゴケ、ナミガタタチゴケ、コスギゴケが子器をつけ生育しており、ハミズゴケ、スナゴケ、コツボゴケなどもみられる。少し湿つた日陰にはジヤゴケ、ヒメジヤゴケの苔類が所せましと一面に生え、すぐ側の小川の水中にはシミズゴケが浮いている。予想以上に豊富だ。

温泉に着いて3日目の13日は、朝から降りそうな天候で何となく陰気だ。午前中は「仙人岩」まで足をのばす。午后になるとますますあたりが暗くなる。雪か、それとも雨か。天候を気にしながら「五輪の湯」の東側を歩く。約50m東に野天風呂で有名な「金壺の湯」がある。自然石の溶槽で高瀬川の清流を眺め、ミソサザイの美声を聞きながなつかつていると全く天下泰平だ。この地点は海抜878m、泉質は単純炭酸泉で温度は43°Cあり、約150m四方の湯元より鉄管で引湯してきている。その鉄管が「金壺の湯」の西方約15m地点のつぎ目から湯を噴き出し、あたりは湯気でもうもうとしている。鉄管のすぐ下は土が掘れ直径1m、深さ20cmの池ができ溢れ出た湯は小川となつて高瀬川へ注いでいる。側の小道を下つてくるとこの湯池に気がつき、道端へ腰を下したばこをふかしながら暫く眺めていると池の底の隅で何かひらひらしているのが目につく。アオミドロか、草の根か°小枝を拾つて中をかき廻すと淡黒い土が浮び上る。池の外へ出しよくみると木の葉と枯草がからみ合い、その中へ泥が入り込み海苔(のり)のように薄く固つている。さつそく水で流いほぐしていくと、意外にもシロゴケが現れてきた。普通種に比べ植物体が小さく、徒長していて先端が僅か青白く後は淡褐色で、一見してシロゴケとは思われないほどだ。温度計で湯池の温度が38.5°Cとわかり驚く。すぐ野帳へ細く記録する。このようにコケが約40°C近い温泉中に生育していたことは非常に珍らしく、今までの記録として東京都渡辺良象氏によりランヨウハリガネゴケ、チヤボサワゴケが38°Cの那須三斗小屋温泉中で、カワギシゴケが福島市外上湯温泉の40°Cの中で発見されている。また鳥取大学越智春美氏は関、燕温泉でカワギシゴケが生育していたことや、シマバラミズゴケが硫黄泉の流れに生えていたことなどがそれぞれ発表されているし渡辺良象:〃 蘚苔地衣雑報〃 No.13)がシロゴケの発見は始めての記録である。もともとこのコケは陸上性でギンゴケ、シロガネゴケともいわれ植物体は淡緑色で乾けば銀白色にみえる。大きさは1.5～2.5cm位で大変もろく折れやすい。庭先、道端等の土上、石垣上、樹木上及び屋根上で多くみられる最も普通のコケで世界中に広く分布している。

心配した天候も翌日から快復し、思わぬコケの発見にすつかり気分をよくして残る2日間を有効に使い3日夕方家へ帰つた。　(山博学芸員)

シジウカラ　長沢修介

何処に行つても白一色の世界になり今迄にあんなに賑かだつた森も今は静まりかえつている。そんな森にさびしそうに枝わたりしているのがこの鳥の群である。この鳥はカラ類と呼ばれるヒガラ、ヤマガラ、キクイタダキ等と混群を作つて雑木林や神社、森などに冬期間を生活することが多い。群を見ているといつも先頭を切つて歩いているのがシジウカラであり又何か危険がせまつたり怪しいものが近付くと「ツッピン、カラカラ」と大声を出して仲間に合図するのも大体この鳥である。この混群には一定の行動範囲と行動するルートがあり常にそれを巡りあるいているのであるがこの行動範囲から一番遠出するのもこの鳥の様だ。頭の黒色と両頬の白、咽喉から腹にかけての黒い帯が良く目立ち他の種類との区別点にもなる。行動は活発で一刻もじつとしていない。枝から幹、幹から地上、果は梢に逆にぶら下つて食物をあさつている。

食物は森林に有害なマツケムシ、シヤクトリガ類の卵や幼虫が主食で松の種子なども啄む。三月頃から群は分散し繁殖期に入る。巣は樹の洞、石垣や人家の空隙などを利用するが人工巣箱も良く利用する。主として苔を用いた巣を作り産座には動物の羽毛や人の頭の毛なども敷く。卵は白色の地に小斑のある小型の美しいもので7個から12個産む。

又この鳥は縁起をかつぐ人や商売には嫌れる。それは鳴声の「ツッピン、カラカラ」というのがシジウカラという名前になつた様にそれは「始終空つぽ」の意味に通じるのだそうだ。

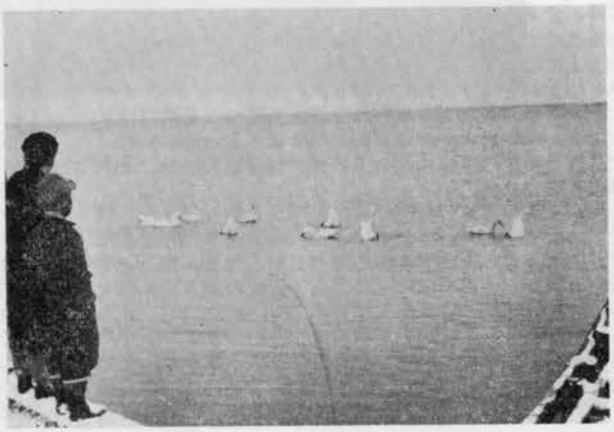
雪に遊ぶ友の会

雪まつり　2月7日。鷹狩山で友の会の雪まつりが行なわれた。この日集つたよい子たちは40名、グループに別れてグルー（雪部屋）作り、動物作り、雪合戦などを行い雪の中で楽しい一日を過した。

スキー会　友の会冬の行事の一つとして期待されていたスキー会は、学校の寒休みを利用して2月3日大町スキー場で行なわれた。参加会員は49名、好天に恵まれ少しの事故もなく全員元気にスキーを楽しんだ。

オオハクチヨウ　羽田 健三

この写真は昭和35年1月24日、島根県の宍道湖（しんじこ）でとつたものです。ここは禁猟区になつていて鉄砲をうつことができません。このようにオオハクチヨウがいる湖には新潟県の瓢湖（ひようこ）などがあります。そもそも瓢湖に来るようになつたのは最近でたまたま迷つて飛んできたオオハクチヨウに餌などあたえて保護したためそれから毎年来るようになつたのです。しかしこの頃の新聞でハクチヨウを銃で撃つて食べてしまつたりしたことが載つておりました。残念なことです。保護さえすればこんなに近くまで（写真の子供とオオハクチヨウを見て下さい）寄つてくるのです。　（信大講師）



会報各地より集る

当博物館の山岳図書室充実計画の一環として行なわれている山岳団体機関紙収集に当つては全国各地の団体の御協力が得られ、現在下記の団体から会報がとどけられております。ここに紙上を借りて厚く御礼申し上げると共に一層の御援助をお願いいたします。

機関紙を寄贈された団体（カツコ内は誌名）

山岳同志会（同志）、泉州山岳会（葛城）、わらじの仲間（わらじ）、苦小牧山岳会（風不死）、東京アルコウ会（会報）、山小屋クラブ（榾火）、紫岳会（紫岳）佐賀大学山岳部（会報）、雪標山岳会（会報）、愛媛大学山岳会（愛大山岳）、独標登高会（年報独標）、立石敏雄氏（九州の山他）、しんつくし山岳会（山径）、東京北稜山岳会（稜友）、落葉松山岳会（からまつ）、谷の影山岳会（REPORT）、東斐山岳会（東斐月報）東京都庁山岳部（部報）、千葉大学医学部山岳部（部報）京都山岳会（京都山岳）、亀田与三次（白山）、氷稜山岳会（氷稜）、広島山稜会（峠）、老らく山岳会（通信）奥多摩山岳会（奥多摩・レポート）

○お知らせ

大町山の会では〝新人〟を募集しております。23才未満の男女で山に情熱を持つている人と云う条件がついております。申込は大町市北福島商店、山岳博物館、松川村武田パン店の3ヶ所です。なお入会金は200円だそうです。期間は3月20日までです。

お願い　本紙の購読ご希望の方は**1カ年購読料170円**（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。　大町山岳博物館

山と博物館　第5巻第2号　1960年2月25日発行
発行所　長野県大町市 TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　長野市岡田町 176
第一法規出版株式会社